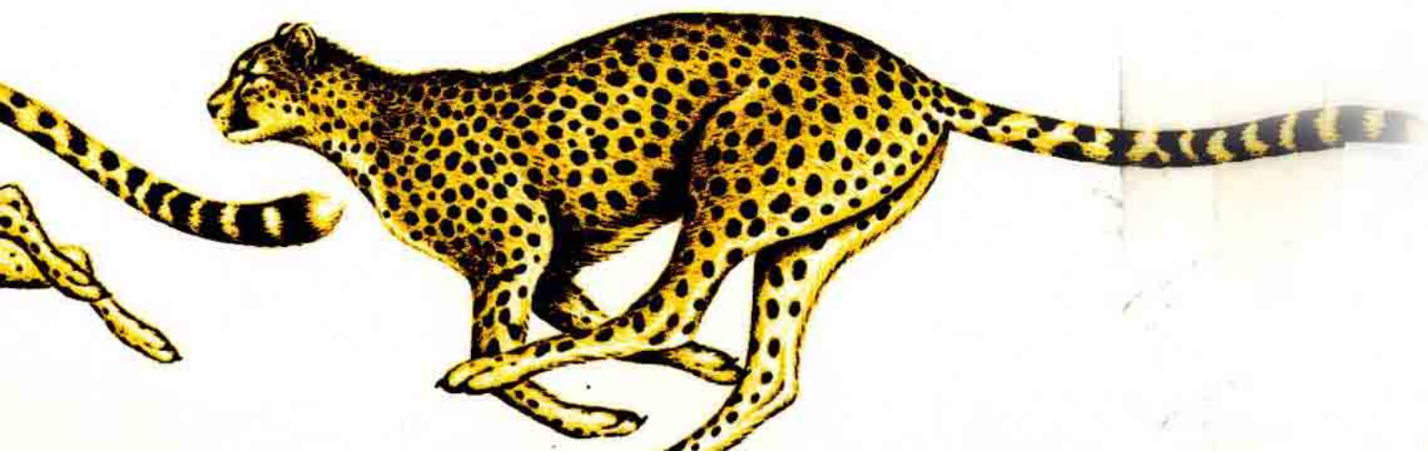
MARUZEN LIBRARY

文章の書き方

会得の12ポイント

酒井憲一

文章論や文章表現論といった理論ではなく、筆者の豊かな経験から導き出された実地に役立つこの12のポイントさえマスターすれば、達者な文章が書けるようになる。



酒井憲一

文章の書き方

会得の12ポイント

丸善ライブラリー

文章の書き方
会得の12ポイント　　丸善ライブラリー 248

平成 9 年 10 月 20 日　発　行

著作者　酒　井　憲　一

発行者　鈴　木　信　夫
出版事業部 深山恒雄

発行所　丸善株式会社

出版事業部　〒103 東京都中央区日本橋三丁目9番2号
編集部　電話(03)3272-0513／FAX(03)3274-0581
営業部　電話(03)3272-0521／FAX(03)3274-0551
郵便振替口座　00170-5-5

© Ken'ichi Sakai, 1997

組版印刷・中央印刷株式会社／製本・株式会社 星共社

ISBN 4-621-05248-9 C0281　　Printed in Japan

はじめに

文章上達を思い立った人々のために、文章の書き方といった本が後から後から出版されています。一冊求めてもうまくならず、また一冊求めてもそうで、ついついこうした本が卓上に積み重なってしまいます。どの本にもあまりにもたくさんのことが書かれてあって、いざ書くとうまくいかなくて絶望感がつのり、やがて文章上達への道をあきらめてしまう人が、意外に多いのではないでしょうか。

表現というのは、技術ではなく人間だ、心だ、内容だといわれます。その意味で、これでもかこれでもかと網羅された手ほどきの本ではなく、かといって、要約だけで忘れることも早い参考書と違って、最小限にしぼった内容に、人間交流の物語をまぶし、印象的に会得できる構成にしました。長年にわたってまとめてきた核心部分は、これを機会にさらに絞り込みました。それが最小限の文章上達12ポイント（一ダースポイント）です。

個性や年齢が私と違う読者のみなさんに、このポイントを得心していただくために、ジャー

ナリスト、コラムニスト、論説委員、朝日カルチャーセンター添削者、くらしの文章講座、清泉女子大学文学部の文章表現法講義、コラム長期連載など、これまでの人生の大半をかけた経験を織り込み、文章論や文章表現論といった理論ではなく、実地に役立つ手法を書きました。また、若い読者を中心に想定しましたので、内容は古風な権威にこだわりませんでした。

また、常識や先入観による一面的な見方、マンネリ的表現の克服を強調しました。みなさんは、卵は割れやすいと思いますか。そう思い込んでいるだけではありませんか。その証拠に、縦につまんでみてください。満身の力を集中しても割れません。文章の書き方も、この縦の卵のように、手ごたえのあるポイントを発見することです。

時代は携帯電話、PHS、パソコン通信、インターネットに次いで、デジタル多チャンネル放送時代を迎えるなど、新情報革命のまっただなかです。電話は面倒な文章から遠ざかり、書く作業の衰退をみせつけましたが、ワープロ、FAX、パソコン通信、インターネットは、逆に書く作業への回帰現象をみせています。テレビの二十四時間放送の増加も、映像を支える質のいい文章の需要を生み出す可能性があります。

また、グローバルになってきた日本語は、国語・国文学から日本語・日本文学への改称がふえています。そして、日本語をさらに洗練させていくことが、ますます求められています。母国語を駆使することが、生活や学問の大本です。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

文章表現法というのは、大学の講義の言い方で、「文章の書き方」のことです。このコツを大胆に絞って示しました。何事を身につけるにも、自分の波長に合う本探しが肝要です。この思い切った本が、あなたの波長に合い、上達への「文章豹変法」になることを期待します。

さあ、みなさん、ありとあらゆる紙に文章を書いていきましょう。

文章の書き方◇目次◇

第1ポイント　感動とひらめき……1
第2ポイント　思想と思いがなくては……16
第3ポイント　ただ読む書くだけでは……27
第4ポイント　何を書きたいか、どう書くか……36
第5ポイント　「要するに」で分かりやすく簡潔に……48
第6ポイント　起承転結の会得……60
第7ポイント　正確と格調……78

第8ポイント　マンネリやめ光る表現を……96
第9ポイント　説明より描写……122
第10ポイント　虚実ないまぜ是々非々で……133
第11ポイント　上滑りの推敲でなく……144
第12ポイント　ジャンル別の要領……158
手紙文（158）／エッセイ（166）／小説（175）／詩（183）／
コピー（193）／小論文・レポート（197）
引用・参考文献……210

第1ポイント　感動とひらめき

感性を曇らせない

深く物事に感じて心を動かすことが、いい文章の書き始めです。感動は、感激より深い心の状態です。これはソフトな文章、ハードな文章、叙情文から論文まで、一切の文章の前提です。ひらめきは瞬時の心の着想機能ですが、これもまたいい文章の書き始めです。

感動が先にくる場合、ひらめきが先にくる場合、同時にくる場合があります。多いのは、感動にひたっているうちに、アイデアが浮かぶことです。まず稲妻のようにひらめきます。そのひらめきに感動し、それが熟していくこともあります。ひらめきは、いい題材をもたらすだけでなく、個々のいい表現を生み出していきます。こうしたことは、私たちが日常体験していることです。つまり、感動やひらめきがなければ、いい文章は書けないといえます。ひらめきは、啓示、直感、インスピレーションといってもいいでしょう。

感動やひらめきをもたらす感性は、曇ってはなりません。論文といったジャンルは、感動・ひらめきと無関係のように思われがちです。でも、考えてみてください。発明や法則の発見といったことも、契機といえば、観察や思索の途中での感動的ひらめきによることが、そのほとんどといわれるではありませんか。

感動には、情的感動と知的感動、ひらめきにも情的と知的とがあるといいますが、情的・知的が融け合った感動やひらめきもあります。

感動・ひらめきを契機に、感動を持続して文章にして練り上げていくことが、文章表現法の出発点です。それがないと、いい文章は書けません。

感動のなかには、一行詩のあることを初めて知って感動した、という若い女性の話を聞きました。図書館へ近世の怪奇小説を調べにいって、何気なく安西冬衛という人の詩集が目に入ったといいます。開いてみますと、ある題のところは、一行しか載っていないのです。まさかそれだけの詩があるとは思わなかったので、次の行を探したが見つかりません。

てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた

やがて、その一行で完結していることを知って、この蝶がなぜ韃靼海峡を渡らなければなら

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

なかったのか、そしてどこへいってどのような物語をつくるのかと、衝撃的に思い描いて感動したというのです。これはよく知られた詩なのですが、この女性は初めてそれに出合って、素直に感動したのです。

こうした感動が、もともと関心のあった詩への志を強め、同時に一行詩があるなら、自分なりに一行文というものを書いてみようとひらめいたといいます。一行ずつ文章の練度を上げて、文章がうまくなりました。

日本一短い手紙コンクール「一筆啓上」というのもあります。「父」のテーマでは、「父がコップに残したビールは、父の残りの人生のようで、寂しくなりました」などが一筆啓上賞をとりました。また、一言絶句という試みも生まれ、「あなたは接続詞みたいにキスをする」というような作品がみられます。絶句というのは、漢詩のひとつの形式ですが、それをもじったものです。

また、短歌形式の手紙「はがき歌」コンテストもあって、「便り無い息子へ　一行でいいから　ポストに入れなさいはがき百枚ひとまず送る」などが大賞でした。

このように一、二行ものが流行しています。それは手軽さが受けているわけで、文章が安っぽく荒れるといって反対する人がいます。けれども、センスよく凝集して書くことはいいことです。

もうひとり、学生の例が参考になりましょう。四月の初講義は、とりわけ学生にインパクトを与えるために、工夫して臨みます。宮沢賢治生誕百年のときは、小首を傾けている賢治の木彫り人形をかざして話し始めました。ソフト帽に外套姿のつるつる木地のこけし人形です。細丸い化粧品の瓶くらいの大きさで、首がぐらぐら動きます。花巻の宮沢賢治記念館前の工房で求めたものです。みなさんご存じのトレードマークの賢治像でした。

一斉に好奇の目で、学生たちが見つめました。好奇心は大事なことなのです。そのひとりが「驚きと決意」という感想文を書きました。「近視と後ろの席だったこととで、最初それが人形とは思えませんでした。何に見えたかと聞かれると、とてもここには書けないようなモノに見えたのです。ここには書かないというのは、反則でしょうか。ここまで記した以上は、書く責任が発生するのでしょうけど。それが驚きでした。講義の終了までには、こんなに上達したのだなあと、先生を驚かせる文章を書けるようになる決意です」というのです。

その学生が何を想像して書いたかは、今の時代を考えると、私にも想像できます。昔はひらめいても書けませんでした。しかし、時代も違いますし、それに下手にたしなめては、せっかく書きたくなりそうな好奇心の率直な芽を摘むことになります。私は品格が好きですが、こうした学生にいきなりいってはいけないのです。その後もこの学生の書くものは、どこか常識を超えた箇所があり、個性的に伸びていくことを期待しています。

「もらい感動」を大事に

こんなことがありました。清泉女子大学の卒論制作のため、しばらく帰郷して私の講義に出られなかった学生がいました。ある日、私自身が高揚して終えた授業を詳述して、その学生に送ることによって、全人的教育効果が上がるに違いないと直感しました。自分の講義に自分で感動することは、めったにあるものではありません。そこでリアルに講義の語り口を再現して、送ろうと思ったのです。

感動は、ただ感動しているだけでは、文章表現法が期待するそれではありません。ひらめき・直感もきっかけをつくることに終わって、表現にならなければ、文章表現法の勉強にとってはむなしいではありませんか。

感動やひらめき・直感を言葉、といっても音声・電話の言葉というより、文章にして伝え合うことがベストです。帰宅してすぐワープロで、その日の講義を話した通りにヴィヴィッドに書き、投函しました。

これを読んだその学生は「もらい感動」して、卒論の追い込みに、いっそうのエネルギーを集中できたといいます。そして、卒論を提示し、上智大学大学院文学研究科の試験を受け、パスしました。

考えてみれば、モノがあふれ、逆に感動が薄れていく時代です。それだけに授業で感動を繰り返し話させますので、「感動したことは何かが大変難問だった」「感動がこんなにいつも身近にあるとは」「きょう感動したことはと毎日自問し、書く題材に困らなくなった」といった感想が目立ってきます。情けないことに、感動の仕方のノウハウ本まで市販される時世なのです。

私は二年生から四年生までを合同で教えてきました。その受講にあたっては、一年目は単位が出るのですが、あとはいくら受講しても単位は出ません。それでも二年、三年と受講をつづける熱心な学生がいます。単位のための受講を超えたほんものの勉強です。「もらい感動」したその学生は、二年目もつづけて受講していたのでした。

電子メール、インターネットによる文章回帰

手軽な携帯電話・PHSの普及で、肉筆書きや面倒な本格的文章づくりは、ますます敬遠される風潮です。手紙ひとつ書けなくてどうする、ラブレターひとつ書けなくてどうする、と学生にいってみても「手紙なんて電話ですんでしまう。ラブレターなんて、おかしくって。電話ですむけど、それより面と向かっていえばいいじゃない」という返答が圧倒的です。

そうはいっても、恋文コンテストが、一方でヒットしているのです。八十代の女性まで応募していました。エネルギッシュな国だと思います。恋文コンテストは、自筆に限ったかどうか

知りません。けれども、実際の恋文は、若い人たちがワープロでも何でも、単に電話がわりでない文章を書いてくれればいいのです。恋文だって、手書きとワープロ併用でいいではありませんか。要は、心と内容と文章です。

昔は恋文をコンクール用に書いたり、公表したりすることは考えられませんでした。片想いの初恋をした私は、恋文らしい恋文を書く機会がなく、そのことを書いたのは、ずっと後年、『山と溪谷』正月号に随想を頼まれたときでした。「湯煙の向こうの青春」と題した原稿がそれでした。それに比べて、今は何と率直な時代でしょうか。

ところで、パソコン通信、インターネットと文章の関係はどうでしょう。軽すぎる文章が多すぎるにしても、電話から文章への回帰が目立ちます。電話から文章への回帰には、ＦＡＸの効用も大きなものがありました。そして、電話もＦＡＸも、キーボードで書く電子メール（E-mail）も、インターネットも熱心という人がいるでしょう。キーボードで書くにしても文章は文章です。インターネットを使い、文章創造に燃えている作家もいます。

パソコンで文章を書き、ハードディスクに写して、大量にストックできる時代です。紙のファイルやワープロのフロッピーよりも、簡単にそれができるのです。パソコンを通信に使った電子メールもかなり普及し、電話がわりのメッセージから、本格的文章の交信までがみられます。

けれども、忘れてならないのは、そうした機器を使ったシステムは、あくまで手段であるということです。人間の感動と内容を伝える手段として、駆使する装置なのです。文章は、感動が書くのです。

また、英語独占のインターネットに、日本語がふえてきました。それだけ、日本語が世界から見直されてきたのです。それなのに、まだまだインターネットでの文章意識は弱く、文章をイラストや写真と同じ視覚映像くらいに考えている人が、少なくないのは事実です。そのための文章表現を創造するためには、やはり文章づくりの本で基礎を学習したうえで、これを乗り越えていってほしいと思います。

第百十六回芥川賞『海峡の光』の作者で三十七歳の辻仁成が受賞の弁で、若い人たちが文学から離れ、「超カッコイイ」といった言葉で、会話を成り立たせていることはさみしいと語りました。

初め手書きでなくてはといっていた私も、今ではワープロを使って書く方が多くなりました。漢字変換で異字が出てくることの多いワープロは、思考の集中を妨げるといわれましたが、慣れで克服できました。それよりも字が下手で、書き始めては、何枚も破棄する癖に悩まされてきたことがなくなり、どしどし書けるようになりました。また、手書きの簡単な手紙より、ワープロで感想が多く書き込まれた手紙をもらう方が、心の糧になります。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com